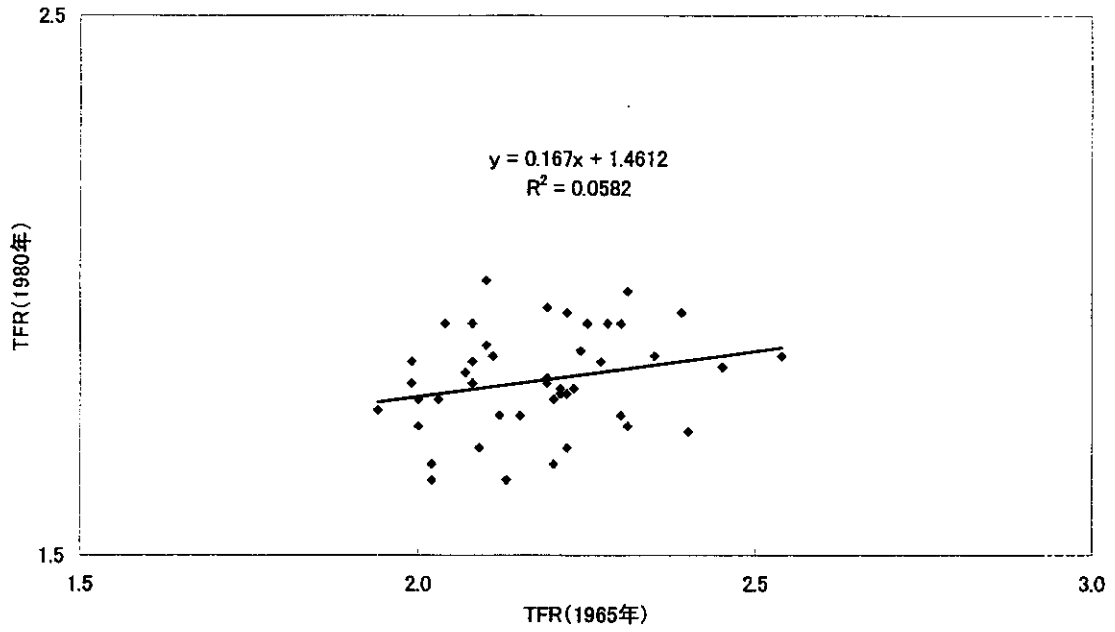
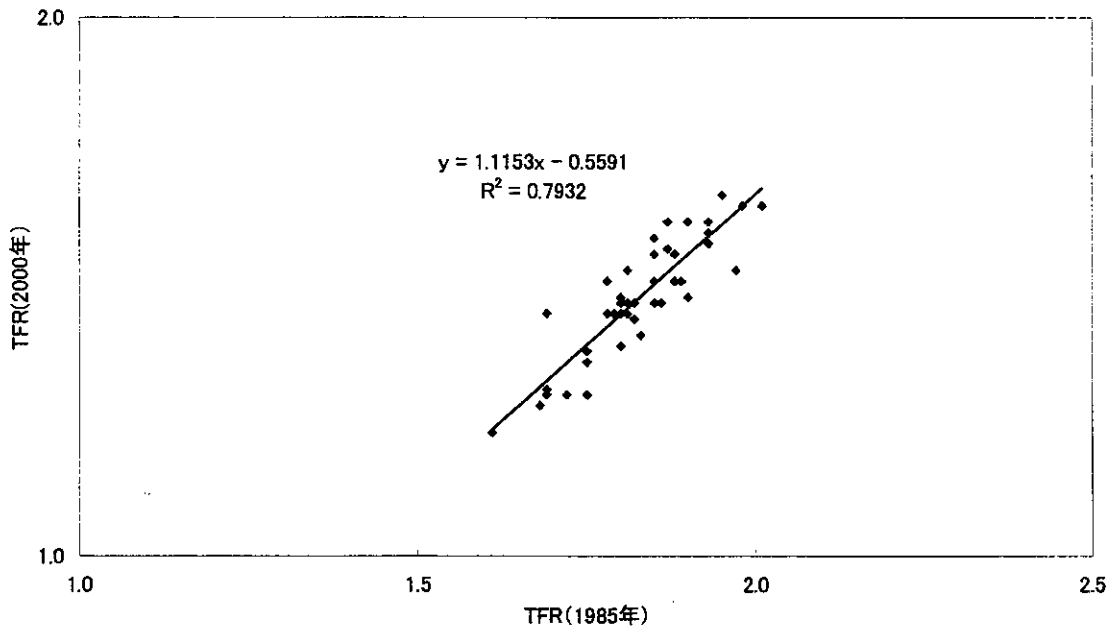


図1 1965-1980 TFR の相関



(注) 東京と沖縄を除く

図2 1985-2000 TFR の相関



(注) 東京と沖縄を除く

図3 1980年～2000年のTFRによる都道府県分類

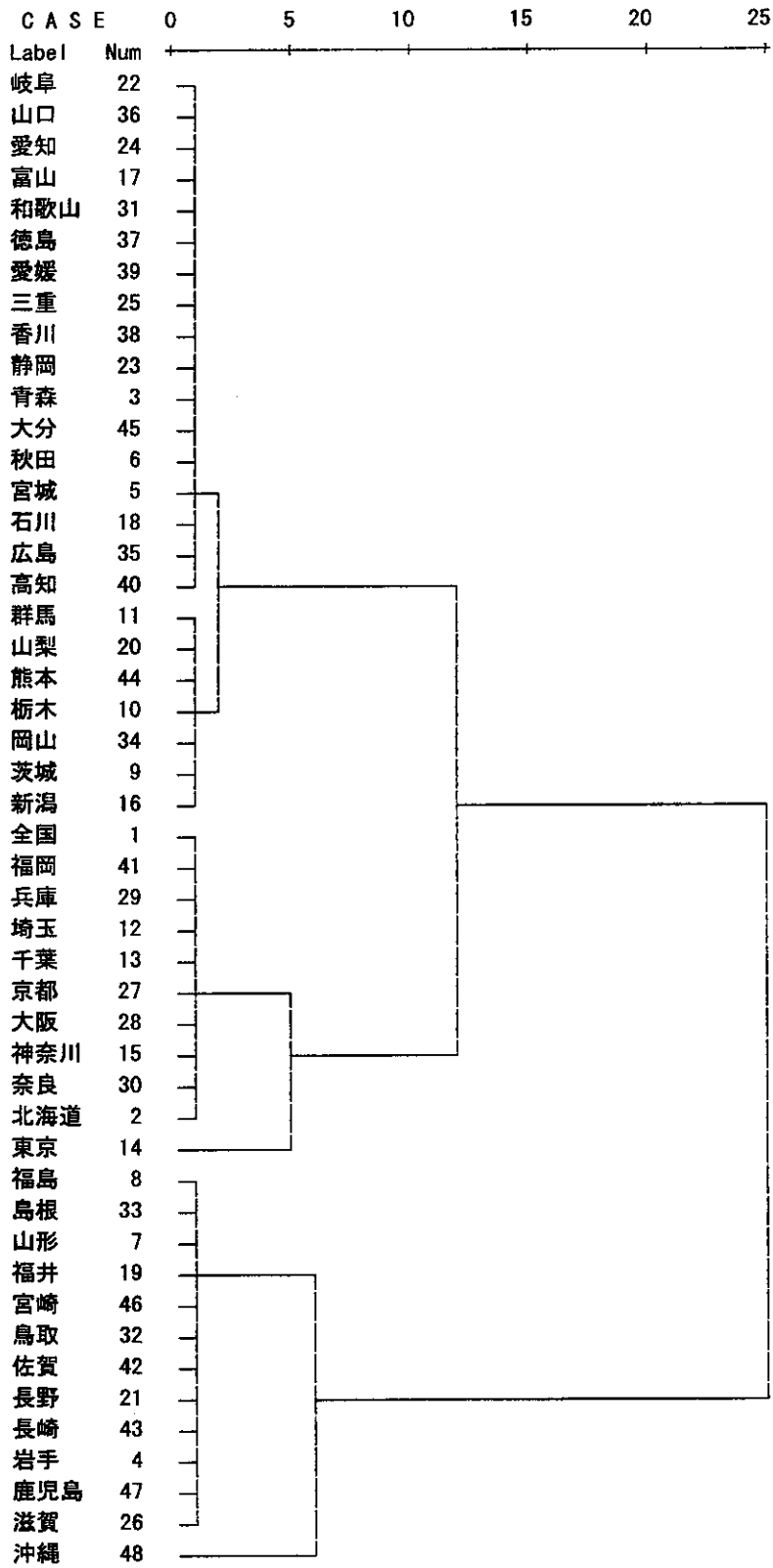
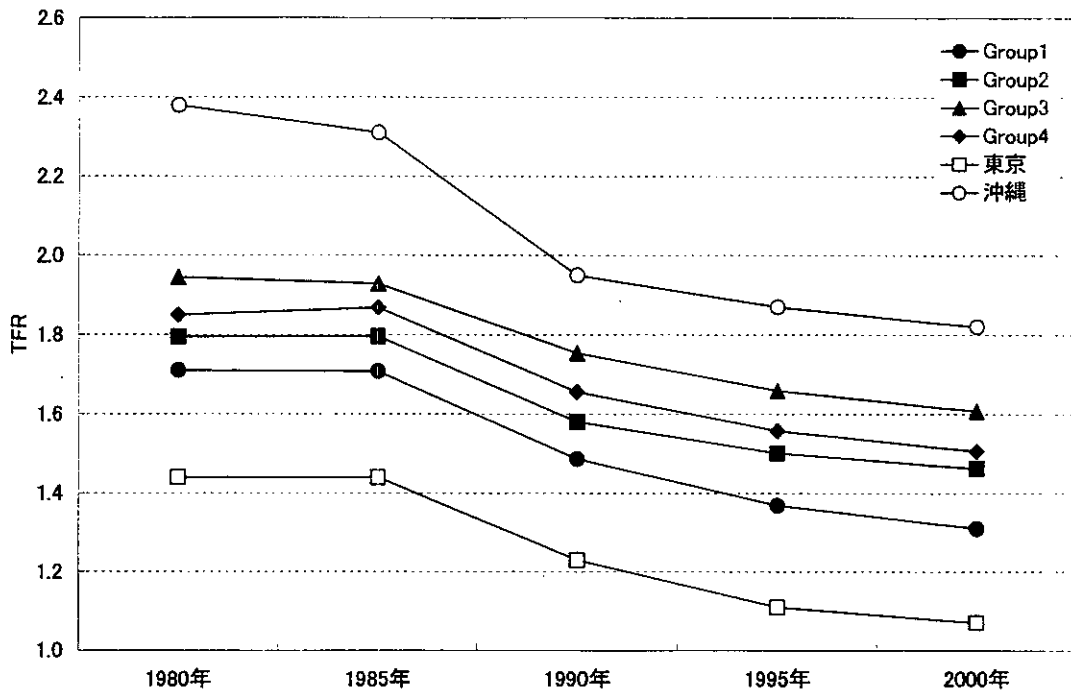


図4 グループ別にみたTFRの推移



Group1: 北海道、埼玉、千葉、神奈川、京都、大阪、兵庫、奈良、福岡

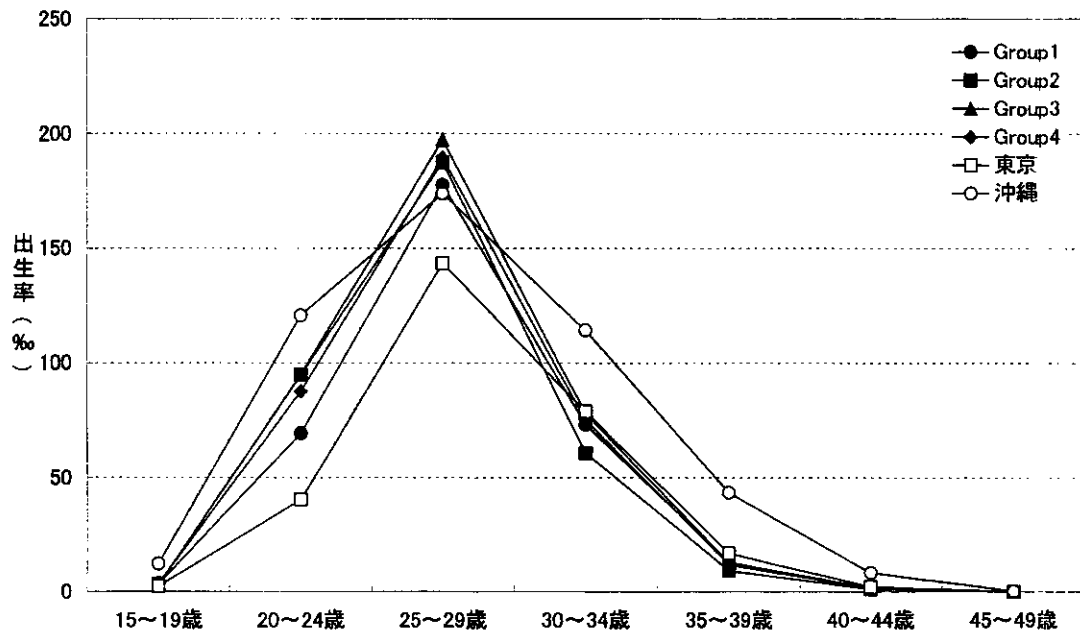
Group2: 青森、宮城、秋田、富山、石川、岐阜、静岡、愛知、三重、和歌山、広島、山口、徳島、香川、愛媛、高知、大分

Group3: 岩手、山形、福島、福井、長野、滋賀、鳥取、島根、佐賀、長崎、宮崎、鹿児島

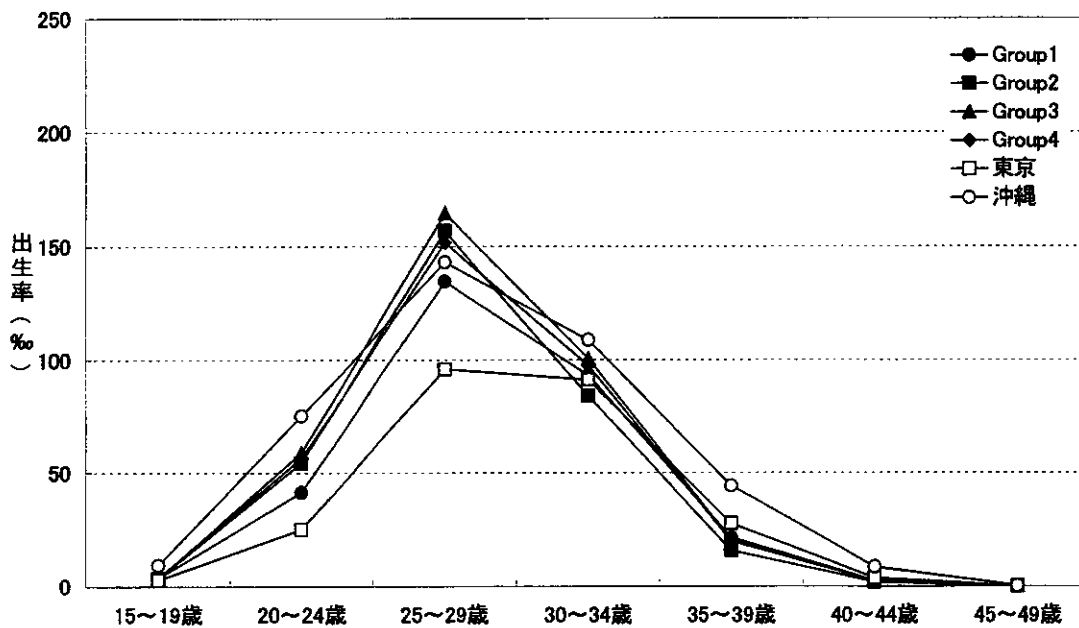
Group4: 茨城、栃木、群馬、新潟、山梨、岡山、群馬

図5 グループ別にみた年齢別出生率

1980年 年齢別出生率



1990年 年齢別出生率



2000年 年齢別出生率

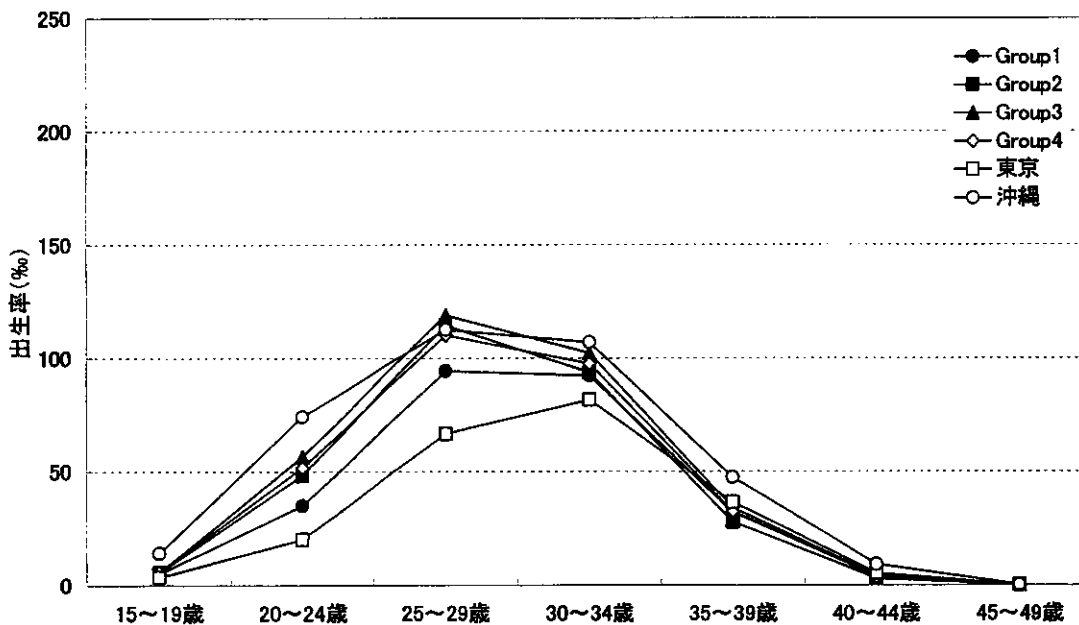
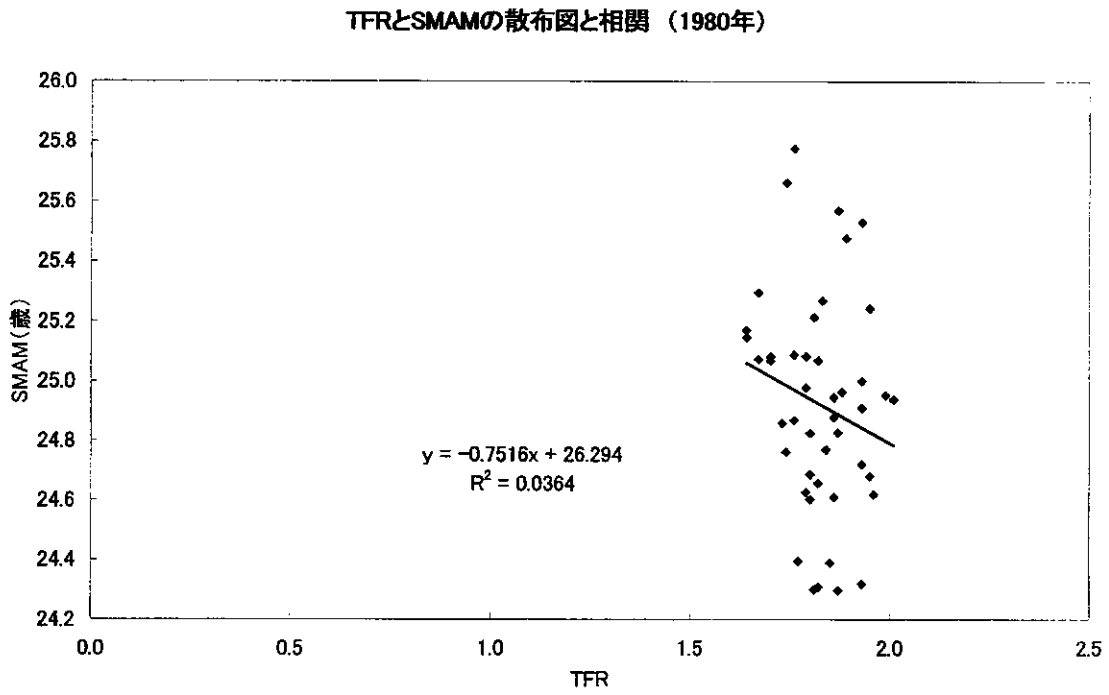
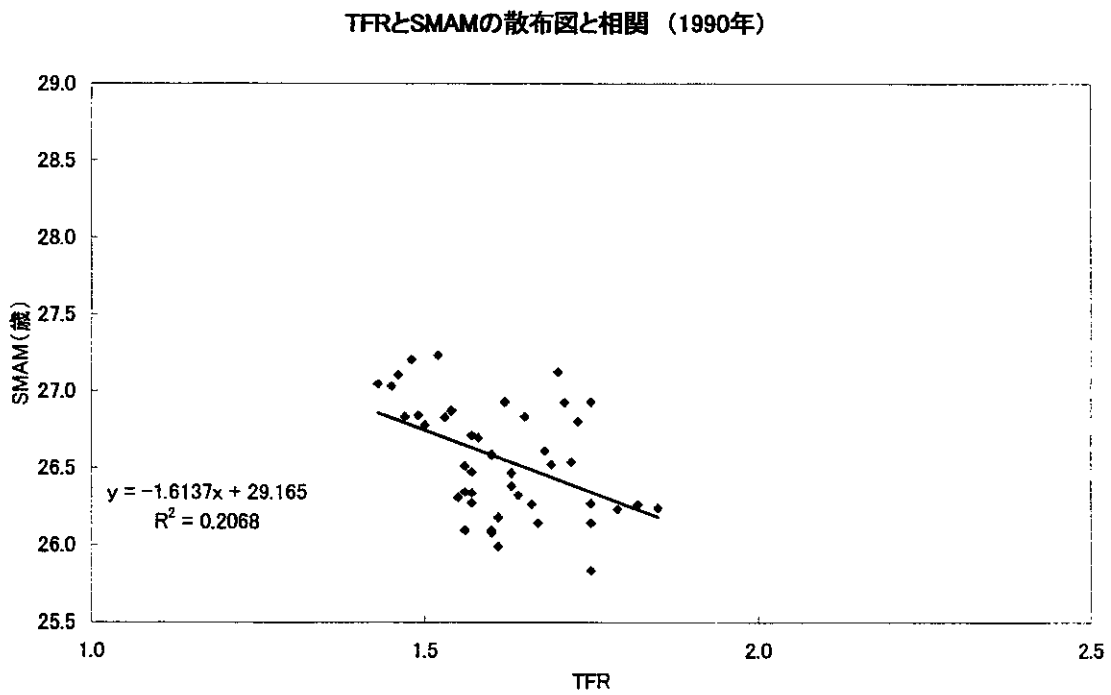


図6 合計特殊出生率と平均初婚年齢の相関

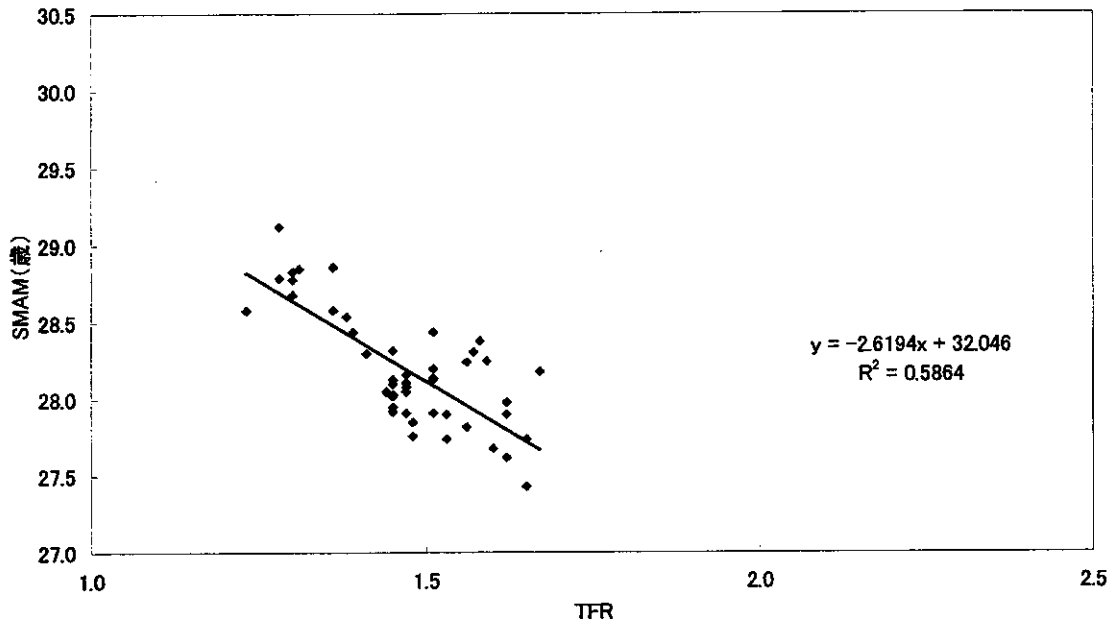


(注) 東京と沖縄を除く



(注) 東京と沖縄を除く

TFRとSMAMの散布図と相関（2000年）



(注) 東京と沖縄を除く

図7 20～34歳における出生率の合計特殊出生率への寄与率

20-34歳出生率の合計特殊出生率への寄与率

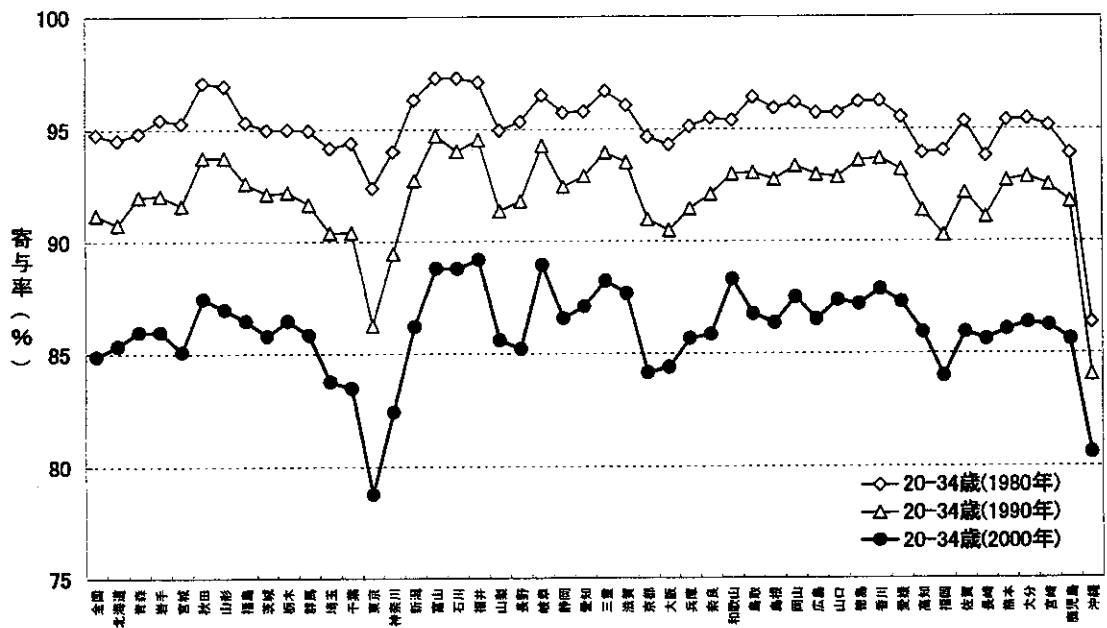


表2 重回帰分析の結果

20～24歳における出生率

記述統計量

	平均値	標準偏差	N
出生率	47.635	10.464	47
女子の未婚者割合	0.834	0.030	47
女子の高校卒割合	0.396	0.076	47
有配偶女子の雇用者割合	0.369	0.059	47
有配偶女子の親との同居割合	0.242	0.096	47
就業時間(有配偶男子の常勤者)	49.334	0.839	47

モデル集計

モデル	R	R2乗	調整済み R2乗	推定値の標準誤差	変化				
					R2乗変化量	F変化量	自由度1	自由度2	有意確率 F変化量
1	0.951	0.905	0.893	3.421	0.905	77.896	5	41	0.000
2	0.949	0.900	0.890	3.467	-0.005	2.147	1	43	0.150

係数

モデル	非標準化係数		標準化係数 ベータ	t	有意確率	Bの95%信頼区間		相関係数		共線性の統計量		
	B	標準誤差				下限	上限	ゼロ次	偏	部分	許容度	VIF
1 (定数)	368.285	40.476		9.099	0.000	286.543	450.028					
女子の未婚者割合	-254.149	31.221	-0.717	-8.140	0.000	-317.201	-191.097	-0.919	-0.788	-0.392	0.300	3.337
女子の高校卒割合	26.090	13.870	0.190	1.881	0.067	-1.922	54.102	0.805	0.282	0.091	0.227	4.411
有配偶女子の雇用者割合	-41.922	13.254	-0.237	-3.163	0.003	-68.689	-15.155	0.388	-0.443	-0.152	0.412	2.425
有配偶女子の親との同居割合	15.566	10.623	0.143	1.465	0.150	-5.887	37.019	0.556	0.223	0.071	0.245	4.084
就業時間(有配偶男子の常勤者)	-2.177	0.801	-0.174	-2.720	0.010	-3.794	-0.561	-0.606	-0.391	-0.131	0.564	1.772
2 (定数)	374.428	40.804		9.176	0.000	292.081	456.774					
女子の未婚者割合	-238.588	29.758	-0.673	-8.018	0.000	-298.641	-178.534	-0.919	-0.778	-0.392	0.339	2.951
女子の高校卒割合	37.247	11.751	0.272	3.170	0.003	13.532	60.962	0.805	0.439	0.155	0.325	3.082
有配偶女子の雇用者割合	-30.327	10.777	-0.172	-2.814	0.007	-52.076	-8.578	0.388	-0.398	-0.137	0.641	1.561
就業時間(有配偶男子の常勤者)	-2.665	0.738	-0.214	-3.610	0.001	-4.154	-1.175	-0.606	-0.487	-0.176	0.682	1.466

25～29 歳

記述統計量

	平均値	標準偏差	N
出生率	109.539	11.899	47
女子の未婚者割合	0.464	0.031	47
女子の高校卒割合	0.449	0.074	47
有配偶女子の雇用者割合	0.423	0.067	47
有配偶女子の親との同居割合	0.202	0.100	47
就業時間(有配偶男子の常勤者)	50.213	0.955	47

モデル集計

モデル	R	R2 乗	調整済み R2 乗	推定値の標準誤差	変化				
					R2 乗変化量	F変化量	自由度1	自由度2	有意確率 F変化量
1	0.792	0.628	0.582	7.690	0.628	13.825	5	41	0.000
2	0.788	0.621	0.585	7.667	-0.007	0.743	1	43	0.394

係数

モデル	非標準化係数		標準化係数	t	有意確率	95% 信頼区間		相関係数			共線性の統計量		
	B	標準誤差				下限	上限	ゼロ次	偏	部分	許容度	VIF	
	1 (定数)	496.376	86.305		5.751	0.000	322.080	670.672					
女子の未婚者割合	-181.888	54.449	-0.476	-3.341	0.002	-291.850	-71.926	-0.624	-0.463	-0.318	0.447	2.238	
女子の高校卒割合	-23.874	27.702	-0.148	-0.862	0.394	-79.819	32.071	0.570	-0.133	-0.082	0.310	3.229	
有配偶女子の雇用者割合	-53.420	27.399	-0.299	-1.950	0.058	-108.754	1.914	0.411	-0.291	-0.186	0.386	2.594	
有配偶女子の親との同居割合	50.384	20.668	0.424	2.438	0.019	8.644	92.124	0.573	0.356	0.232	0.300	3.337	
就業時間(有配偶男子の常勤者)	-5.562	1.489	-0.448	-3.711	0.001	-8.589	-2.535	-0.661	-0.501	-0.354	0.628	1.592	
2 (定数)	460.741	75.523		6.101	0.000	308.329	613.153						
女子の未婚者割合	-154.799	44.324	-0.405	-3.482	0.001	-244.247	-65.350	-0.624	-0.474	-0.332	0.670	1.492	
有配偶女子の雇用者割合	-50.440	27.097	-0.283	-1.861	0.070	-105.124	4.244	0.411	-0.276	-0.177	0.392	2.552	
有配偶女子の親との同居割合	42.072	18.223	0.354	2.309	0.026	5.296	78.848	0.573	0.336	0.219	0.383	2.610	
就業時間(有配偶男子の常勤者)	-5.308	1.465	-0.426	-3.623	0.001	-8.265	-2.352	-0.661	-0.488	-0.344	0.653	1.530	

30～34 歳

記述統計量

	平均値	標準偏差	N
出生率	96.547	6.947	47
女子の未婚者割合	0.199	0.021	47
女子の高校卒割合	0.519	0.077	47
有配偶女子の雇用者割合	0.420	0.081	47
有配偶女子の親との同居割合	0.239	0.117	47
就業時間(有配偶男子の常勤者)	50.613	0.894	47

モデル集計

モデル	R	R2 乗	調整済み R2 乗	推定値の標準誤差	変化				
					R2 乗変化量	F変化量	自由度1	自由度2	有意確率 F変化量
1	0.537	0.288	0.202	6.208	0.288	3.323	5	41	0.013
2	0.525	0.276	0.207	6.188	-0.013	0.739	1	43	0.395
3	0.497	0.247	0.195	6.234	-0.028	1.631	1	44	0.209
4	0.481	0.231	0.196	6.229	-0.016	0.933	1	45	0.339

係数

モデル	非標準化係数	標準誤差	標準化係数	t	有意確率	B の 95% 信頼区間		相関係数			共線性の統計量		
						下限	上限	ゼロ次	偏	部分	許容度	VIF	
1 (定数)	285.903	75.796		3.772	0.001	132.829	438.976						
女子の未婚者割合	-73.257	56.985	-0.226	-1.286	0.206	-188.342	41.827	-0.383	-0.197	-0.169	0.564	1.773	
女子の高校卒割合	-25.559	18.627	-0.283	-1.372	0.177	-63.177	12.059	0.221	-0.210	-0.181	0.409	2.443	
有配偶女子の雇用者割合	-16.680	19.409	-0.195	-0.859	0.395	-55.876	22.517	0.280	-0.133	-0.113	0.337	2.964	
有配偶女子の親との同居割合	23.201	15.145	0.392	1.532	0.133	-7.385	53.787	0.393	0.233	0.202	0.266	3.764	
就業時間(有配偶男子の常勤者)	-3.163	1.367	-0.407	-2.314	0.026	-5.923	-0.403	-0.406	-0.340	-0.305	0.561	1.781	
2 (定数)	258.625	68.615		3.769	0.001	120.153	397.096						
女子の未婚者割合	-77.183	56.625	-0.238	-1.363	0.180	-191.457	37.090	-0.383	-0.206	-0.179	0.568	1.762	
女子の高校卒割合	-27.487	18.434	-0.304	-1.491	0.143	-64.688	9.714	0.221	-0.224	-0.198	0.415	2.408	
有配偶女子の親との同居割合	16.734	13.102	0.282	1.277	0.209	-9.707	43.175	0.393	0.193	0.168	0.353	2.835	
就業時間(有配偶男子の常勤者)	-2.696	1.250	-0.347	-2.157	0.037	-5.219	-0.173	-0.406	-0.316	-0.283	0.667	1.500	
3 (定数)	276.791	67.616		4.094	0.000	140.431	413.151						
女子の未婚者割合	-110.263	50.722	-0.339	-2.174	0.035	-212.555	-7.971	-0.383	-0.315	-0.288	0.718	1.393	
女子の高校卒割合	-15.384	15.927	-0.170	-0.966	0.339	-47.504	16.736	0.221	-0.146	-0.128	0.564	1.772	
就業時間(有配偶男子の常勤者)	-2.970	1.241	-0.392	-2.394	0.021	-5.473	-0.468	-0.406	-0.343	-0.317	0.687	1.456	
4 (定数)	236.289	53.003		4.458	0.000	129.469	343.110						
女子の未婚者割合	-89.296	45.808	-0.275	-1.949	0.058	-181.615	3.024	-0.383	-0.282	-0.258	0.879	1.138	
就業時間(有配偶男子の常勤者)	-2.410	1.096	-0.310	-2.199	0.033	-4.619	-0.201	-0.406	-0.315	-0.291	0.879	1.138	

表3 重回帰分析の結果（地域グループダミーを導入したモデル）

20～24歳における出生率

モデル集計

モデル	R	R2乗	調整済み R2乗	推定値の標準誤差
1	0.975	0.951	0.938	2.609
2	0.975	0.951	0.939	2.591

係数

モデル		非標準化係数		標準化係数	t	有意確率
		B	標準誤差	ベータ		
1	(定数)	274.532	39.882		6.884	0.000
	女子の未婚者割合	-193.084	27.084	-0.545	-7.129	0.000
	女子の高校卒割合	28.183	11.266	0.206	2.502	0.017
	有配偶女子の雇用者割合	-22.744	12.077	-0.129	-1.883	0.068
	有配偶女子の親との同居割合	6.382	9.133	0.059	0.699	0.489
	就業時間(有配偶男子の常勤者)	-1.489	0.702	-0.119	-2.120	0.041
	地域グループ2(ダミー)	2.648	1.544	0.123	1.715	0.095
	地域グループ3(ダミー)	5.142	1.752	0.217	2.935	0.006
	地域グループ4(ダミー)	4.376	1.683	0.151	2.601	0.013
	東京(ダミー)	-4.906	3.118	-0.068	-1.574	0.124
	沖縄(ダミー)	17.972	3.456	0.251	5.200	0.000
	2	(定数)	275.061	39.598		6.946
女子の未婚者割合		-185.234	24.473	-0.522	-7.569	0.000
女子の高校卒割合		32.507	9.350	0.237	3.477	0.001
有配偶女子の雇用者割合		-17.149	8.978	-0.097	-1.910	0.064
就業時間(有配偶男子の常勤者)		-1.678	0.644	-0.134	-2.606	0.013
地域グループ2(ダミー)		2.617	1.533	0.121	1.708	0.096
地域グループ3(ダミー)		5.119	1.739	0.216	2.943	0.006
地域グループ4(ダミー)		4.635	1.630	0.159	2.844	0.007
東京(ダミー)		-5.631	2.919	-0.078	-1.929	0.061
沖縄(ダミー)		18.161	3.421	0.253	5.308	0.000

25～29 歳

モデル集計

モデル	R	R2 乗	調整済み R2 乗	推定値の標準誤差
1	0.932	0.869	0.833	4.867
2	0.932	0.869	0.837	4.807
3	0.932	0.868	0.840	4.757
4	0.929	0.862	0.837	4.798

係数

モデル		非標準化係数		標準化係数	t	有意確率	
		B	標準誤差	ベータ			
1	(定数)	203.676	76.791		2.652	0.012	
	女子の未婚者割合	-13.381	43.341	-0.035	-0.309	0.759	
	女子の高校卒割合	-38.813	17.875	-0.240	-2.171	0.037	
	有配偶女子の雇用者割合	-11.275	20.591	-0.063	-0.548	0.587	
	有配偶女子の親との同居割合	23.097	14.751	0.195	1.566	0.126	
	就業時間(有配偶男子の常勤者)	-1.693	1.268	-0.136	-1.336	0.190	
	地域グループ2(ダミー)	17.061	3.226	0.696	5.289	0.000	
	地域グループ3(ダミー)	24.904	3.514	0.922	7.086	0.000	
	地域グループ4(ダミー)	15.687	3.324	0.474	4.720	0.000	
	東京(ダミー)	-27.629	6.085	-0.339	-4.540	0.000	
	沖縄(ダミー)	16.204	6.457	0.199	2.510	0.017	
2	(定数)	191.504	65.087		2.942	0.006	
	女子の高校卒割合	-36.270	15.668	-0.224	-2.315	0.026	
	有配偶女子の雇用者割合	-8.473	18.255	-0.047	-0.464	0.645	
	有配偶女子の親との同居割合	21.512	13.658	0.181	1.575	0.124	
	就業時間(有配偶男子の常勤者)	-1.621	1.231	-0.130	-1.317	0.196	
	地域グループ2(ダミー)	17.549	2.776	0.716	6.321	0.000	
	地域グループ3(ダミー)	25.363	3.145	0.940	8.065	0.000	
	地域グループ4(ダミー)	16.051	3.070	0.485	5.228	0.000	
	東京(ダミー)	-28.335	5.570	-0.347	-5.087	0.000	
	沖縄(ダミー)	16.271	6.373	0.199	2.553	0.015	
	3	(定数)	186.144	63.390		2.937	0.006
女子の高校卒割合		-36.918	15.444	-0.228	-2.390	0.022	
有配偶女子の親との同居割合		17.695	10.791	0.149	1.640	0.109	
就業時間(有配偶男子の常勤者)		-1.564	1.212	-0.125	-1.290	0.205	
地域グループ2(ダミー)		17.573	2.747	0.717	6.397	0.000	
地域グループ3(ダミー)		25.226	3.098	0.934	8.142	0.000	
地域グループ4(ダミー)		16.133	3.033	0.488	5.319	0.000	
東京(ダミー)		-29.229	5.172	-0.358	-5.652	0.000	
沖縄(ダミー)		15.912	6.261	0.195	2.542	0.015	
4		(定数)	104.648	5.543		18.878	0.000
		有配偶女子の親との同居割合	-35.380	15.529	-0.219	-2.278	0.028
	CR25_29fm	21.892	10.377	0.184	2.110	0.041	
	地域グループ2(ダミー)	19.476	2.337	0.795	8.332	0.000	
	地域グループ3(ダミー)	26.896	2.839	0.996	9.475	0.000	
	地域グループ4(ダミー)	17.702	2.802	0.535	6.317	0.000	
	東京(ダミー)	-29.381	5.215	-0.360	-5.634	0.000	
	沖縄(ダミー)	20.641	5.119	0.253	4.032	0.000	

30～34 歳

モデル集計

モデル	R	R2 乗	調整済み R2 乗	推定値の標準誤差
1	0.879	0.772	0.709	3.749
2	0.879	0.772	0.717	3.698
3	0.879	0.772	0.724	3.650

係数

モデル	非標準化係数		標準化係数 ベータ	t	有意確率
	B	標準誤差			
1 (定数) 女子の未婚者割合 女子の高校卒割合 有配偶女子の雇用者割合 有配偶女子の親との同居割合 就業時間(有配偶男子の常勤者) 地域グループ2(ダミー) 地域グループ3(ダミー) 地域グループ4(ダミー) 東京(ダミー) 沖縄(ダミー)	118.935	63.419		1.875	0.069
	5.462	42.100	0.017	0.130	0.897
	-55.008	12.871	-0.608	-4.274	0.000
	-22.160	12.377	-0.259	-1.790	0.082
	32.929	9.620	0.556	3.423	0.002
	-0.019	1.150	-0.002	-0.017	0.987
	4.680	2.506	0.327	1.868	0.070
	16.427	2.928	1.042	5.610	0.000
	9.949	2.740	0.515	3.631	0.001
	-13.510	4.557	-0.284	-2.965	0.005
	19.406	5.425	0.407	3.577	0.001
2 (定数) 女子の未婚者割合 女子の高校卒割合 有配偶女子の雇用者割合 有配偶女子の親との同居割合 地域グループ2(ダミー) 地域グループ3(ダミー) 地域グループ4(ダミー) 東京(ダミー) 沖縄(ダミー)	117.881	9.762		12.075	0.000
	5.601	40.715	0.017	0.138	0.891
	-55.006	12.696	-0.608	-4.333	0.000
	-22.108	11.817	-0.258	-1.871	0.069
	32.955	9.371	0.556	3.517	0.001
	4.703	2.102	0.329	2.237	0.031
	16.449	2.558	1.044	6.431	0.000
	9.970	2.390	0.516	4.171	0.000
	-13.523	4.430	-0.284	-3.053	0.004
	19.464	4.161	0.409	4.678	0.000
	3 (定数) 女子の高校卒割合 有配偶女子の雇用者割合 有配偶女子の親との同居割合 地域グループ2(ダミー) 地域グループ3(ダミー) 地域グループ4(ダミー) 東京(ダミー) 沖縄(ダミー)	118.979	5.540		21.478
-54.654		12.274	-0.604	-4.453	0.000
-21.971		11.623	-0.257	-1.890	0.066
32.412		8.389	0.547	3.863	0.000
4.576		1.867	0.320	2.451	0.019
16.302		2.292	1.034	7.113	0.000
9.851		2.198	0.510	4.481	0.000
-13.331		4.150	-0.280	-3.212	0.003
19.505		4.096	0.410	4.762	0.000

(注1) 都道府県別の近年の出生力格差について分析した主なものとして、国土庁計画・調整局(1998)、厚生省人口問題研究所(1990)、高橋眞一(1997)等があり、都道府県別出生力に関する主な指標は、石川晃(1987)や人口問題研究所の統計資料欄において整理されている。

(注2) 都道府県別の公表されている出生率は、その算出にあたって国勢調査年次以外は分母人口に推計による総人口が用いられていること、1975年以降沖縄が国勢調査の対象地域として復活しており、1980年以降はデータに安定性がみられることなどから、分析には1980年以降の国勢調査年次のデータを用いている。

(注3) 第10回、第11回出生動向基本調査の結果によると、夫婦の完結出生児数を規定する要因としては、妻の結婚時の年齢が最も説明力のある変数となっている。

(注4) 1990年までの都道府県別初婚年齢の研究に、厚生省人口問題研究所(1993)渡邊吉利による分析がある。

(注5) 20～34歳における出生寄与率の著しく低い都道府県は、東京と沖縄である。東京は、35歳以上の出生率が他の都道府県と比較して若干高いこと、また、20～34歳の出生率それ自体が極めて低く35歳以上での出生率のシェアが自ずと高くなっていることによる。沖縄では、他の都道府県と比較して20～34歳の出生率水準が低いわけではなく、10歳台および35歳以上の出生率自体も高いことから、相対的に20～34歳のシェアが低くなっている。1980年以降、各都道府県とも20～34歳における出生率の寄与率に著しい低下が見られるが、なかでも東京のそれは著しく、他地域との格差が拡がりつつある。逆に、沖縄では35歳以上での出生率が徐々に低下していることから、全国の水準に接近している。

(注6) 2000年国勢調査では、それ以前の調査では得難かった配偶関係別データ等の整備が進み、本稿で用いた都道府県別の諸変数の採用が可能となった。

<参考文献>

- ・国土庁計画・調整局編『地域の視点から少子化を考える－結婚と出生の地域分析－』1998年8月、大蔵省印刷局
- ・厚生省人口問題研究所編『出産力調査に基づく結婚と出生の地域分析』厚生省人口問題研究所 調査研究報告資料第3号、1990年3月
- ・高橋眞一「出生力の地域的分析」『地域人口分析の基礎』1997年4月、古今書院
- ・渡邊吉利『都道府県別未婚率と初婚年齢(SMAM)の推移』人口問題研究所 研究資料第277号、1993年3月
- ・石川晃『都道府県別人口の出生力に関する主要指標』人口問題研究所研究資料246号、1987年2月

5. 地方自治体における人口統計指標と少子化対策

小島 宏

はじめに

本研究の目的は、2000年10月に参議院事務局第二特別調査室により実施された「都道府県及び市町村における少子化の実情と少子化対策についての実態調査」の個票データと旧厚生省『人口動態保健所・市区町村別統計—人口動態統計特殊報告—』掲載の人口関係統計指標のロジット分析に基づき、地方自治体の少子化に関する認識・施策の関連要因を明らかにすることである。

本研究では市区町村レベルの少子化の実態と対策に関する認識・行動・評価に対する人口統計指標とその申告の関連を明らかにすることを試みる。分析モデルには市郡区分、地方ブロック区分、合計特殊出生率（TFR）の変化率区分（c1990-c1995年）、TFRの全国平均からの乖離率区分（c1990・c1995年）、婚姻数に対する出生数の比の区分（c1995年）、婚姻数に対する離婚数の比の区分、1995年TFR回答の有無と厚生省推定値からの乖離の区分、1995年出生数回答の有無と乖離の区分といったダミー変数を独立変数として導入した。

ところで、「少子化」であるが、これは元来、人口学用語ではない。むしろ、官製用語ないし官庁（統計）用語である。管見の限り、初出は『平成4年度国民生活白書—少子社会の到来、その影響と対応—』であり、定義らしきことが「こうした出生率の低下やそれともなう家庭や社会における子供数の低下傾向、すなわち少子化の動向とその影響が注目されるようになってきた」という形で書かれている（経済企画庁 1992, p.1）。

1. データ

本研究で用いるマイクロ・データは、参議院事務局第二特別調査室から㈱日本総合研究所に委託されて2000年10月に実施された「都道府県及び市町村における少子化の実情と少子化対策についての実態調査」に基づく個票データである（日本総合研究所 2001）。筆者は当時、同室の特別調査員を併任していたことからそのデータの使用を許された。

調査対象者は地方自治体「少子化担当セクションの責任者」であるが、その自治体は人口20万人以上の全市区町村とそれ以下の人口規模については規模に応じて減少する抽出率で抽出した計1,131市区町村で、そのうち523市区町村から有効回答が得られた。同時に全都道府県を対象とする類似の調査票による調査が実施され、37都道府県から有効回答が得られたが、本研究では市区町村のみを分析対象とし、都道府県は対象としない。

同調査では対象自治体における人口統計指標の数値を尋ねているが、「少子化担当セク

ションの責任者」により回答されているはずであるにも関わらず、合計特殊出生率（TFR）については回答が少ない（1995年については119）。市区町村レベルの人口動態統計指標の推定値については厚生省（当時）大臣官房統計情報部が1999年に刊行した『平成5～9年 人口動態保健所・市区町村別統計―人口動態統計特殊報告―』やその前の版に掲載されており、1995年前後5年間平均のTFRのベイズ推定値もあるが、それが利用されていないことがうかがわれる。しかし、出生数については業務統計としてまとめられているためか回答が多い（1995年については428）。

他方、それらの市区町村に関するマクロ・データは旧厚生省大臣官房統計情報部『昭和63年～平成4年 人口動態保健所・市区町村別統計―人口動態統計特殊報告―』および『平成5～9年 人口動態保健所・市区町村別統計―人口動態統計特殊報告―』に基づく市区町村別の人口統計指標である。具体的には、1990年前後と1995年前後各5年間についての合計特殊出生率、出生数、婚姻数、離婚数である。1995年前後5年間の合計特殊出生率のうち小規模自治体のものについては「ベイズ推定値」が用いられているが、問題点がないわけではない（美添 2001）。

2. 分析方法

本研究で適用する統計的手法は多項ロジット分析（SAS/CATMOD Procedure）であるが、解釈を容易にするためにダミー・コーディングを用いた。分析の対象とする従属変数は大きく次の3種類に分類される。

従属変数 A: 当該自治体に関する人口統計指標（合計特殊出生率・出生数）の回答・厚生省推定値からの乖離

従属変数 B: 当該自治体における少子化に関する認識

従属変数 C: 当該自治体における少子化に関する対策

他方、分析に用いられる独立変数は大きく次の3種類に分類される。

独立変数 A: 自治体の属性

市郡区分（市部 44%、郡部 56%）、地方ブロック（北海道 6%、東北 12%、関東 22%、近畿 9%、中四国 13%、九州 16%、中部 22%）

独立変数 B: 厚生省推定値に基づく人口統計指標

独立変数 C: 人口統計指標の回答の有無・厚生省推定値との乖離（従属変数 A の一部）

以上の従属変数は具体的には下記の通りである。

従属変数 A: 人口統計指標の回答

- ①直近合計特殊出生率の回答の有無・年次（1999年以降 12%、1998年以前 14%、無回答 74%）
- ② 1995年合計特殊出生率の回答の有無・厚生省5年間推定値からの上下各5%以上の乖離の有無（5%以上 11%、5%以内 12%、無回答 77%）
- ③ 1990年合計特殊出生率の回答の有無・厚生省5年間推定値からの上下各5%以上の乖離の有無（5%以上 7%、5%以内 10%、無回答 83%）
- ④直近出生数の回答の有無・年次（1999年以降 61%、1998年以前 24%、無回答 15%）
- ⑤ 1995年出生数の回答の有無・厚生省5年間推定値からの上下各5%以上の乖離の有無（5%以上 11%、5%以内 70%、無回答 19%）

従属変数 B：少子化認識

- ⑥少子化が全国より深刻な問題か（深刻 53%、深刻でない 7%、全国程度 40%）
- ⑦ 少子化対策の必要性が全国より高いか（高い 56%、低い 5%、全国程度 39%）
- ⑧ 少子化はどのような現象か（合計特殊出生率低下 20%、出生数減少 29%、世帯当たり子供数減少 10%、若年人口減少 41%）

従属変数 C：少子化対策

- ⑨ 少子化対策：条例制定の有無（有 6%、無 94%）
- ⑩ 結婚・出産対策：乳幼児医療費負担軽減実施の有無（有 86%、無 14%）
- ⑪ 結婚・出産対策：異性交際促進公的イベント実施の有無（有 19%、無 81%）
- ⑫ 少子化対策としての外国人受入れの有効性（高い 5%、低い 32%、検討課題 63%）
- ⑬ 実施中の少子化対策の有効性（有効 53%、有効でない 24%、不明 23%）
- ⑭ 1999年度「少子化対策臨時特例交付金」活用の有無（無 2%、有 98%）
- ⑮ 1999年度「少子化対策臨時特例交付金」継続希望の有無（有 61%、無 9%、判断困難 30%）
- ⑯ 今後の少子化対策重点分野（結婚・出産対策 9%、その他 19%、子育て支援 72%）

以上の独立変数のうち、独立変数Aについては内訳と頻度分布がすでに示されているが、独立変数Bと独立変数Cについては下記の通りである。

独立変数 B：人口統計指標

- ① c1995年合計特殊出生率推定値 / c1990年合計特殊出生率推定値（0.9未満 21%、1.0以上 19%）
- ② c1995年合計特殊出生率推定値 / c1995年合計特殊出生率全国平均値（1.0未満 29%、1.25以上 22%）
- ③ c1990年合計特殊出生率推定値 / c1990年合計特殊出生率全国平均値（1.0未満 27%、1.25以上 18%）
- ④ c1995年出生数 / c1995年婚姻数（1.5未満 20%、2.0以上 17%）

⑤ c1995年離婚数 / c1995年婚姻数 (0.2未満19%、0.3以上19%)

独立変数 C : 人口統計指標回答

⑥ 1995年合計特殊出生率の厚生省5年間推定値からの上下乖離 (5%以上11%、5%以内12%)

⑦ 1995年出生数の厚生省5年間推定値からの上下乖離 (5%以上11%、5%以内70%)

3. 分析結果

分析結果は以下の通り、従属変数の種類に応じて表の形で示した。まず、表1に示された、人口統計指標回答の有無の規定要因に関する分析結果をみると、直近年の合計特殊出生率(TFR)の回答オッズは市部で高く、近畿地方と低離婚比の場合に低い。1995年のTFRの回答オッズは市部で高く、(1990年前後から1995年前後にかけての)TFR上昇と高離婚比の場合に低く、1990年のTFRの回答については市部と北海道で高く、TFR上昇の場合に低い傾向がみられる。

出生数の回答についても部分的にTFRの回答の場合と類似の傾向がみられる。直近の出生数は、低下率が大きい場合に回答のオッズが高く、市部、1995年のTFRが全国平均値と比べて低い場合、結婚出生比が高い場合に回答のオッズが低い。1995年出生数の回答についても類似した傾向が見られ、高結婚出生比の負の効果の代わりにTFR上昇の正の効果が見いだされる。

表1. 人口統計指標の回答(有無)に関するロジット分析結果

従属変数	区分	有意な独立変数と効果
直近合計特殊出生率回答 (vs 無)	有	市部 (+)、近畿 (-)、離婚比小 (--)
95年合計特殊出生率回答 (vs 無)	有	市部 (+)、上昇 (-)、離婚比大 (--)
90年合計特殊出生率回答 (vs 無)	有	市部 (+)、北海道 (+)、上昇 (--)
直近出生数回答 (vs 無)	有	市部 (-)、低下率大 (+)、低出生率 (-)、結婚出生比大 (-)
95年出生数回答 (vs 無)	有	市部 (-)、低下率大 (+)、上昇 (+)、低出生率 (-)

次に、表2に示された、人口統計指標回答の年次の規定要因に関する分析結果をみると、合計特殊出生率が回答された直近年が1999年以降であるオッズは市部とTFR低下が大きかった場合で高く、近畿地方で低いが、1998年以前であるオッズは市部で高く、九州と低離婚比の場合で低い。しかし、TFRの場合とは逆に、市部で出生数が回答された直近年が1999年以降であるオッズも1998年以前であるオッズも低かったが、これは市部で出生数を回答しない傾向（郡部で合計特殊出生率を回答しない傾向）が強いためだと思われる。このほか、出生数が回答された直近年が1999年以降であるオッズはTFR低下率が大きい場合に高く、低出生率、高結婚出生比の場合に低いが、1998年以前であるオッズは近畿地方、1990年に低出生率であった場合で高く、低出生率の場合で低い。

表2. 人口統計指標の回答（年次）に関するロジット分析結果

従属変数	区分	有意な独立変数と効果
直近合計特殊出生率回答年次 (vs 無回答)	99年以降	市部 (+)、近畿 (-)、低下率大 (+)
	98年以前	市部 (+)、九州 (-)、離婚比小 (-)
直近出生数回答年次 (vs 無回答)	99年以降	市部 (-)、低下率大 (+)、低出生率 (-)、結婚出生比大 (-)
	98年以前	市部 (-)、近畿 (+)、低出生率 (-)、90年低出生率 (+)

表3に示された、人口統計指標の回答の厚生省推定値からの乖離の規定要因に関する分析結果をみると、TFR上昇と高離婚比の場合にTFRの格差が上下5%以上となるオッズが低いが、5%以内となるオッズは市部で高く、低離婚比の場合に低い。また、出生数の乖離が上下5%以上になるオッズは市部とTFR上昇の場合に高いが、5%以内になるオッズはTFRが大きく低下した場合と上昇した場合の両方で高く、市部とTFRが全国より低い場合で低い。

以上のTFRの変化率に関する結果はTFRの低下が少子化に対する関心を強めている可能性を示唆する。また、市部でTFRの回答や1999年以降のTFRの回答が多いのも同様の可能性を示す。TFRを計算するような専門職員がいる可能性も考えられるが、市部では申告された1990年・95年のTFRと厚生省推定値との乖離が有意に大きいので、それが計算間違いによるものだとすればそうとも言い切れないが、それが大きな偶然変動によ

る可能性もある。

表3. 人口統計指標の回答（乖離）に関するロジット分析結果

従属変数	区分	有意な独立変数と効果
95年合計特殊出生率回答乖離（vs 無回答）	上下5%以上 上下5%以内	上昇（-）、離婚比大（-） 市部（+）、離婚比小（-）
95年出生数回答乖離（vs 無回答）	上下5%以上 上下5%以内	市部（+）、上昇（+） 市部（-）、低下率大（+） 上昇（+）、低出生率（-）

表4と表5に示された、少子化に関する認識と対策に関する分析においては申告された合計特殊出生率・出生数の厚生省推定値からの乖離も独立変数として追加された。表4は少子化認識の規定要因についての分析結果を示すが、最初のパネルに示された、全国と比べた場合の少子化の深刻さに関する認識についての分析結果をみると、TFRの厚生省推定値が全国よりも低い場合、低離婚比の場合、1995年TFRの乖離が大きい場合に全国より深刻だとするオッズが高いが、市部ではオッズが低い。逆に、全国より深刻でないとするオッズは1995年出生数の乖離が小さい場合に低い。

また、2番目のパネルに示された、全国と比べた場合の少子化対策の必要性に関する分析結果をみると、1990年のTFRが全国よりも高い場合に必要性が高いとするオッズが高く、市部と1995年出生率の乖離が小さい場合で必要性が低いとするオッズが低い。

さらに、3番目のパネルは、少子化現象を「若年人口減少」とする確率に比べた場合の他の回答を選ぶ確率のオッズに関する分析結果を示す。「出生率減」とするオッズは市部と中部地方で高く、1990年のTFRが全国よりも高い場合と離婚比が高い場合に低い。「出生数減」とするオッズは中部地方、結婚出生比が高い場合、1995年出生率の乖離が大きい場合で高く、離婚比が高い場合と1995年出生率の乖離が小さい場合で低い。「世帯子ども数減」とするオッズは中部地方、高結婚出生比の場合に高く、1995年出生数の乖離が大きい場合に低い。

表5に示された少子化対策に関する影響については8項目について示してある。最初のパネルの少子化対策の条例制定のオッズについては中部地方、1995年TFRの乖離が大きい場合で高く、結婚出生比が高い場合で低いという傾向がある。具体的な結婚・出産対策についてみると、乳幼児医療費負担軽減実施のオッズは結婚出生比が低い場合に高く、離婚比が高い場合と1995年出生数の乖離が大きい場合に低くなるという傾向がある一方、異性交際促進の公的イベント実施のオッズは1995年TFRの乖離が小さい場合に高くなる

という傾向がある。

表 4. 少子化認識に関するロジット分析結果

従属変数	区分	有意な独立変数と効果
少子化深刻さ (vs 全国並)	深刻	市部 (-)、低出生率 (+)、離婚比小 (+)、95 年出生率差大 (+)
	深刻でない	95 年出生数差小 (-)
少子化対策必要性 (vs 全国並)	高い	90 年高出生率 (+)
	低い	市部 (-)、95 年出生率差小 (-)
少子化現象 (vs 若年人口減少)	出生率減	市部 (+)、中部 (+)、90 年高出生率 (-)、離婚比大 (-)
	出生数減	中部 (+)、結婚出生比大 (+)、離婚比大 (-)、95 年出生率差小 (-)、95 年出生率差大 (+)
	世帯子供数減	中部 (+)、結婚出生比大 (+)、95 年出生数差大 (-)

少子化対策の有効性のうちで外国人受け入れについてみると、北海道、東北、結婚出生比が高い場合で有効であると認識するオッズが高くなる一方、1990年に出生率が低かった場合にオッズが高くなるが、市部と 1995 年出生数の乖離が大きい場合で低くなるという傾向がある。少子化対策の有効性については、結婚出生比が低い場合、1995 年 TFR の乖離が小さい場合、1995 年出生数の乖離が小さい場合で有効であると認識するオッズが高くなる傾向がある一方、中四国、離婚比が低い場合、1995 年 TFR の乖離が小さい場合に有効でないと認識するオッズが高く、結婚出生比が高い場合に低くなる傾向がある。

国による平成 11 年度限りの「少子化対策臨時特例交付金」についてみると、その活用のオッズは、TFR 低下率が大きい場合と 1995 年出生数の乖離が大きい場合に高い。また、その継続希望があるオッズは低出生率の場合、1995 年 TFR の乖離が小さい場合に高く、1995 年出生数の乖離が大きい場合に低い。他方、今後の少子化対策重点分野として「子育て支援」を選択するオッズは TFR 低下が大きかった場合に高く、中四国で低くなる一方、「結婚・出産対策」以外の周辺分野を選択するオッズは離婚比が小さい場合、1995 年